り、泣き泣きでもひもを結んで屋根を作ったり（一―㈤）、クレヨンをまず拾ってから、大急ぎで絵を描きに走っていく（二―㈢）ということができるようになってきたのである。

ここでは、S子に於て、先程一般的事柄に於てイマジネーションを働かせ想いを巡らせたのと同じこと、つまり、別個の力を、〃結ぶ〃という点で統一し、新しい自己の世界を作り出していったことが、推測されるだろう。

保育に於て、〃イメージ〃をとらえていくということで、以上に見て来たように、ひとりの子どもの活動の過程を通して、子どもと共に、子どもの世界を経験することが可能となり、また、そのこと自体、大人が既存の枠にとらわれない新しい生活へ入っていく糸口となるのである。

（お茶の水女子大学　大学院）

結ぶ

――出発と終息の十字路――

本田和子

古い時代に、女たちは、愛する人を送るとき、その着衣の紐を心をこめて結んだ。彼女らは、「結ぶ」ことによって、離れていく人の上に何を祈ったのであろうか。「結ぶ」とは、「封じ込める、保つ」という意を持っている。肉体に紐を固く結ぶことは、霊魂を内に保つ行為であった。愛する人の霊をその体に封じ込め、健やかな旅を願ったのでもあろうか。そしてまた、再会するその日まで、肉体も魂も変ることなく、という女の想いも込められていたことだろう。結ばれた紐は、結んだ女が解くべきものとされていたという。

各地から出土する縄文の土器、とりわけ瓶のような器の上部に、紐が巻きつけられしっかりと結ばれたものが見出される。また、同じ出土品の石棒の頭部にも、藤つるの皮などが巻かれ、固

い結び目を見せていたりする。

「結ぶ」ことの呪術、すなわち、それによって霊力を生まれさせ、或いは保とうとする呪的行為は、人の歴史の遥か彼方に、その起源を持つということになろうか。

＊　＊　＊

一本の紐は、結び合わせると輪になる。輪は、内と外を区切って、その中に閉じられた空間を作り出す。輪の内側は、外界から遮断され、内密の空間として特別な意味を帯び始める。「結ぶ」という話が、「占有する」という意味でもあるのは、このゆえかもしれない。

人と人は、結ばれることによって、お互いを占有し合うのだろうか。自己の内部が他者によって占められ、他者の内側もまたこの自分が充たしていると感じるなら、自と他の区別は自ずから不明となろう。倉橋惣三は、「わが子との真の結合を体験して、われの子どもか、子どものわれか」と驚嘆した。そこには、自分でも他人でもない、新しい何ものかが生まれている。そのとき、人は、主客二分の対立的なありようから逃れて、幸せな一体化へと飛翔することが可能となる。

「結び」の語源は、「陰陽相対的なものが和合して新しい活動を起こす」とある。「結び」とは、「はじまり」なのである。

私どもが、開花の始まりを「蕾を結ぶ」ということばで、また、家庭の出発を「男女が結ばれる」という形でとらえるのは、そのあかしであろうか。

然しながら、同時にそれは、一つのことがらの終焉をも意味している。新しく生まれるために、人は、一度び死なねばならない。「結び」とは、「始まり」と「終り」の十字路なのだ。

私どもは、ものごとの最終部分を、「結び」ということばでまとめる。和服を身につける場合も、帯を結び終えることで着こなしが完成される。一すじの布の「結び」が、その仕上げに位置づくのである。

＊　＊　＊

三月、子どもたちとの生活の「結び」の季節。それは、一連の時間の「終り」であり、同時に新しい時の「始まり」でもある。

一人々々の子どもとの間に張られた「見えない糸」を、ここでもう一度、心をこめて「結び直す」ことを試みよう。

古代人たちのように、子らの旅立ちの幸を祈って。そして、いま結ばれたその糸は、離れていくお互いを、不可分の新しい関係に生きさせるものとなるのである。

（お茶の水女子大学）